

第 1724 回（7 月 22 日）

世界の農業・食糧と NGO

—— FAO 世界食料サミットに参加して ——

（國學院大学） 古 沢 広 祐

私は 1996 年 11 月 13 日～17 日、ローマで開かれた国連「世界食料サミット」に参加しましたが、そこでの議論を中心に報告します。それは、21 世紀の世界の食料・農業がどう展開するか、今後の岐路を見定める意味で非常に興味深い会議でした。なかでも本会議と並行して、NGO（市民団体）によるフォーラム（11 日～16 日）が開かれ、世界 80 カ国から約 1200 人の代表が集まって、本会議の声明に対抗した「もう一つの声明文」を発表し、注目を集めました。

世界食料サミットのローマ宣言に、2015 年までに世界の飢餓人口の半減を目指す目標が明記されたことはご存じの方も多いかと思います。しかし、それは 1974 年の初めての世界食料会議で 10 年以内に飢餓人口の撲滅を目指すことが記されたことを思い起こすならば、人類的な理想とははるかに遠のいた現実的な目標にすぎると言わざるをえません。しかし、実際にはその現実的目標でさえ実現可能かどうかはたいへん疑わしい状況です。というのも、20 年前と比べて現在では 1 人当たりにして 15% も多くの食料を増産しているにもかかわらず購買力がないために飢餓人口は増え続けているからです。つまり、たんなる食料増産など技術的対策だけでは飢餓問題は解決しないということです。言い換えれば、政治的・社会的・経済的な状況の改革こそが飢餓問題の中心テーマとならねばならないということです。

このローマ宣言に対して、NGO は独自の声明を発表しました。そのタイトルはローマ宣言のスローガン「すべての人々に食料」を意識したもので、メインタイトルは「少数のための利益、それとも、すべての人々に食

料」、副タイトルは「飢餓の世界化を消滅させるための食料主権と安全保障」です。ここでとくに注目したいのは、少数＝アグリビジネスの利益という点と、もう一つ“食料主権”です。

つまり前者は、貿易でいったい誰が利益を得ているのかという問いであり、貿易によって排除されたり搾取の関係が生じている問題に対する本質的な問いかけです。後者の“食料主権（Food Sovereignty）”は、食料の独自性の尊重すなわち食の尊厳性と言ったもので、そうした“食と農の尊厳性”（文化）が破壊されたが故に食と農の軽視や、自然・環境そして地域の破壊が進み、結果的に人類の食料安全保障の基盤がゆらいでいるのであって、まさにその復権を目指す闘い、文明的な価値の根源的問いかけが、その真意として織り込まれています。

NGO フォーラムが出した声明文の序文には、「……経済の国際化は、多国籍企業の責任感の欠如、過剰消費パターンの蔓延とともに世界に貧困を増大させた。今日の世界経済は、失業と低賃金そして地域経済と家族農業の崩壊によって特徴づけられる。……」と記され、食料の権利に関する提案項目の冒頭には、「世界食料安全保障の実現のためには、各国の食料の主権が貿易自由化やマクロ経済政策より優先することを、国際法において食料の権利として保障されなければならない。食料は、そのもつ社会的・文化的な次元における重要性においてたんなる商品と見なすことはできない。」と記述されています。

すなわち多くの NGO は、食糧安保を促進する基礎には、貿易の促進ではなく地域社会の永続性、持続可能なコミュニティや農村を維持・促進する体制づくりこそが重要だと主張しているのです。つまり農業・農村がもつ地域経済・コミュニティの下支え機能、食文化に象徴される風土・文化形成など社会的基盤形成、いわゆる地域社会のバランスのとれ

た公正な維持・発展こそが、21世紀の世界の政策の基本となるべきことが世界的に提起され始めていると言ってよいでしょう。

お金の力で幾らでも自由になんでも買える消費者というのは、地球全体の規模からいうとほんの一握り、2割ほどの人だけです。残りの途上国と呼ばれる国の人達は、逆にいろんな資源や物を先進諸国に供給している。食料、農業問題について考えるべき大きなテーマとしては、物が量的にあるかどうかではなくて、消費の問題や貿易のあり方としても問われているということです。どのような形で物を消費しているのか、物を食べているときの食べているものの背後は一体どうなっているのか、それに対する責任をどういう風に自覚しているのか、とこういうことに対する運動や問題提起がいろんな所で広がり始めています。80年代後半から90年代にかけて、実際に欧米の各地で消費・ライフスタイルを問い直さなければいけないという運動がいろいろ出ております。

農業の本来の姿というのは、工業生産のようにものを一つの部分だけ生産するというのではなく、全体の循環の中で維持されています。お米が生産できるというのは、回りの自然から供給されるいろいろなものがあり、それがまた最終的には土に帰っていく。家畜を飼っている餌が与えられるけれど、また土に帰っていく。自分たちの環境のいろいろなものがその資源として利用され、また土に帰っていく。人間もその循環の中で維持されている。人間が生きてるということは、人間だけが生きているのではなくて周りの世界と共に生きている。水田との繋がり、家畜との繋がり、あるいは地域の山々や樹木、それらが人間の生活を支える材料、資材になり、救荒食や薬にもなる。畑も田んぼも林や森林があることで、これらがうまく共存し合う関係で成り立つと、永続可能な持続できる社会として、私たちの生活、食料生産、環境が維持

される。そういう安定した姿になるわけですが、地域的な繋がりが今は消え去ってきています。

FAOサミットに関わったNGOの動きを見るごとく、今後は、とくにWTO（世界貿易機関）やGATT（関税貿易一般協定）といった貿易を促進していく動きに対して、世界全体の貿易構造だけで考えるのではなく、地域と農業、環境と文化の結び付きを考えていこうという運動の新しい動きに注目していく必要があると思います。